

「わたしたちの学校文化」

宝仙学園中学校・高等学校 校長 富士 晴英

本校は、中野坂上にあります。お隣が宝仙寺です。住職が学園の理事長であり、幼稚園から大学まである学園です。本校は、その一つの部門です。

本校は、もとは女子校でした。設立時は、「中野高等女学校」でした。女子校に共学部門「理数インター」がつくられたのが、17年前です。

学園としては、95年目です。「人を造る」という建学の精神のもと、わたしが学校づくりの方針として掲げたのは、「知的で開放的な広場」です。いわば、不易と流行という関係性を、教職員や生徒たちと追究できたらいいと思っています。

さて、今回は、日ごろの学校の取り組みについて、とくにわたしがかわっていることを、紹介することにしたと思います。

まず最初は、朝のあいさつ運動です。毎朝、正門で、登校時の生徒にあいさつを交わしています。あいさつは、みずからおこなうことで、その大切さを実感できるものだと思う

ています。

朝礼の前には、朝読書の時間があります。これに関連して、「筆まかせ」という刊行紙があります。これは、朝読書が続いている学校として、読書体験を分かち合える場を設けたという教員の働きかけから始まりました。生徒自ら執筆・編集する刊行紙もあるのですが、こちらは、本校の全教職員が発信するための刊行紙です。学期ごとに1回ずつ、年に3回発行されます。わたしも、毎回寄稿させてもらっています。もちろん、選書は、書き手の自由です。気持ちよく書いている文章こそ、本も紹介者の魅力も伝わると思っています。

在校生と時間と空間を大切にすることが必要ですが、私学なので、生徒募集も重要です。とくに中学校は、毎月、学校説明会をおこない、直接学校においていただき、本校の空気を理解していただけるように、努めています。

その際、活躍してくれているのが、

在校生です。舞台上でマイクパフォーマンスするお役、学校案内で複雑な校舎を案内してくれるお役、参加者を気遣いつつ声をかけるお役……。お手伝いに名乗りをあげてくれた生徒たちで、本校の空気をつくってくれています。わたしの説明よりも、参加者にきつと率直な印象をあたえてくれていると感謝しています。学校は、授業が中心ですが、学校行事や部活動が持つ意味は、大きいと思っています。学校行事は、体育祭・宝仙祭(文化祭)・合唱祭等のほかに、宿泊研修旅行があります。

わたしは、可能な限り、同行しています。そこで見る生徒の自然体の振る舞いや教員たちの配慮は、そこでこそうかがえるよさがあると思っています。具体的には、個性あるおたがいを尊重しあい、おたがいを生かしあおうとする雰囲気をつくろうとする生徒がたくさんいるということです。感じています。

中学校・高等学校とは、多感な時期の可能性にあふれた学齢の生徒たちが、試行錯誤できる場だと思っています。

わたしたち教職員は、巡り合った生徒たちのよりよい支援ができるよう、尽力したいと思っています。

令和4年度の区内史跡めぐり「成願寺から宝仙寺周辺」を実施しました。令和5年3月27日、午後1時30分より、総人数23名で実施しました。まず、最初は成願寺(じょうがんじ)です。約600年前に中野長者と呼ばれた鈴木九郎によって創建されました。ここでは蓮池藩鍋島家の歴代藩主のお墓と旧防空壕を見学しました。幕末に活躍した新撰組の近藤勇も、家族を成願寺に預けていたそうです。



成願寺山門

幕末に活躍した新撰組の近藤勇も、家族を成願寺に預けていたそうです。

次は、象小屋跡です。現在は、中野区立朝日が丘公園になっています。享保13年(1728年)6月7日、8代将軍吉宗の時にベトナムから雄(7才)と雌(5才)の2頭の象が献上されました。しばらくは長崎で飼育され、翌年の3月になって陸路で江戸に向かい5月27日に江戸城内で上覧されました。その後、中野村の源助に払い下げられこの地で飼われていました。雄の象は寛保2年(1742年)22才で亡くなりました。次は、宝仙寺(ほうせんじ)です。青梅街道から少し北側に仁王門があります。

令和4年度の区内史跡めぐり「成願寺から宝仙寺周辺」を実施しました。